

1 研究課題

現代日本の山間地域における猟師の「自然」経験
— 「豚熱 (CSF)」感染の防疫活動をめぐる映像制作と共有を通して

2 研究成果の概要

本研究は、動物感染症・豚熱 (Classical Swine Fever) に対する福井県大野市の猟師らの防疫活動と再編される狩猟行為を、映像・写真・音声等を通して記録し、共有するものである。2020年から2022年にかけて、新型コロナウイルス感染症の影響により、研究に遅れが生じるとともに軌道修正も必要となったが (5に詳述)、最終的には、調査地にて映像を共有し、猟師らとともに考えることを通して「映像-人類学」を達成することができた。映像制作の過程で得た知見は、岩波書店『思想』誌のマルチスピーシーズ特集に寄稿した論文 (成果1) においても活かされている。

また、欧州で現在進行中のイノシシと感染症に関する研究プロジェクト「BOAR」と研究の射程や関心が共通することから、同研究会にてオンライン発表も行った (成果7)。発表では映像の一部を視聴するセッションも設けたことで、猟師の感染症に対する深い理解を示す言動をめぐって質の高い議論することが可能となった。加えて、欧州における感染症対策に対する調査上の困難についてもやりとりし、長期間にわたり猟師らとともに対策現場に入り、フェーズの変化を観察してきた筆者の調査の特異性も明らかになった。発表前後も含む同プロジェクトでのやりとりを通して、欧州というまとまりで行う比較研究の有用性を学んだことは、筆者の関心を東アジア地域における連帯の可能性へと向ける契機ともなっている。2021年にはオンラインで開催された学会EAAAにて中間報告を行い (成果4)、2023年度は、テーマに「Pandemics, Politics, Potentials」を掲げている同学会 (香港にて開催) で感染症をテーマにした分科会を組織し、現地発表を行う予定である (成果8:採択済)。国際学会の場では、助成期間に得られた成果を共有するだけでなく、研究者間のつながりをつくることで、東アジアにおける豚病の比較研究に向けた働きかけを行っている。

3 研究開始当初の背景

本研究の中心的な対象である豚熱は、2018年に日本で26年ぶりに発症し、岐阜県から列島各地に感染拡大した。2023年現在も各地で蔓延している。豚熱の感受性動物は、ブタとイノシシの二種であり、最初の感染が見つかった岐阜県の近隣地域である福井県の地元猟師は野生イノシシに対する経口ワクチンの散布と、強化捕獲の二種類の対策に従事していた。豚熱防疫の最大の目的は、養豚場への感染拡大を防ぎ、養豚産業への影響を最小にとどめることであり、イノシシの感染が疑われる地域では養豚へのワクチン接種がなされている。かつて日本で流行していたウイルス株はこうしたブタのみへの対策によって撲滅されたが、2018年から拡がりを見せているウイルス株は中程度の病原性であるため、山で感染したイノシシが移動とともに感染を広げていることも指摘されている。

本研究の前提となるフィールドワークを行っていた2019年初夏、山では多くのイノシシが豚熱ウイルスに倒れ、腐敗し、その匂いは、山の麓の地域でも無視できないものになっていた。急激に減っていくイノシシに対して地域での絶滅を危惧していた猟師たちは、岐阜県ですでに対策を開始していた自治体、猟友会と情報交換することで彼らにできることを探っており、筆者は彼らが参与したプロジェクトに猟友会会員として加わっている。

本研究を開始した2020年4月当初、主たるフィールド調査はすでに終えた段階にあったが、調査データ、断片的な映像データを保有しているのみで、整理、構成、理論的位置付けは不十分であった。多種間関係、狩猟、動物感染症、それぞれの研究と関係が深いものの、それらをどう位置付けることができるのかが課題となっていた。本調査は、感染症の「ただなかで」行われたものであり、その様相はフェーズによって大きく異なる。そのため、どのような機序で物事が進んだのかを理解するひとつの手段としても、また何が問題なのかを探求することにとっても「映像によって」考えることが有益だと思われた。

4 研究の目的

本研究は、動物感染症・豚熱の防疫活動に参加することになった猟師らの経験を、映像の形でとらえ、共有することを目的としている。より具体的には、直面した危機と防疫を担うという新たな役割に対して、彼らがどのように応答し、状況を再編していったのかを以下の宛先に対して描写することを目指した。ひとつ目の宛先は、調査地で実際に防疫活動に従事してきたインフォーマントの人々である。箭内匡(2014)は、ジャン・ルーシュが映像を通して現地の人々と向き合ってきた姿勢から「共有」の人類学の重要性を論じているが、本研究も、映像を通して彼らが何をなしてきたのか、感染症の前後で何がどのように変化したのかを共有し、その改編の可能性についても互いに探求することを目指すものである。

ふたつ目の宛先は人類学の学問領域であり、成果をひろく人類学に位置付けることが目的とされる。本研究の調査対象者は、山間地域にて何世代にもわたり狩猟を続けてきた人々であり、これまでの日本の狩猟を対象とした研究の枠組みでは「伝統とその継承」として語られる傾向があった。しかし、ワイルドライフマネジメント、疫学、生態学などの知見を学びながら、自ら感染症対策の実行者となることを試みてきた猟師たちの経験は、ある一定の世界観や文化で説明することは困難である。映像は、そうしたいくつもの論理や世界観を同時に現わすことにも長けている点で有用である。

最後に、本研究の射程は、筆者とインフォーマントのひとびとのあいだ、あるいは日本といった限定された地域にとどまるものでもない。共有人類学を行うことで、現代を生きるひとびととともに、感染症時代の「自然」との向き合い方について考えることを目指す。

5 研究の方法

本プロジェクトは、主に、ジャン・ルーシュの思想と実践が基盤にある「映像—人類学（シネ・アンソロポロジー）」（箭内 2014）を主要な方法論として用いた。「映像—人類学」は、映像を単なる記録の手段としてだけではなく、記述による民族誌と同様に理論的・抽象的考察も行うものとする。フィールドでの追加調査と編集、さらに共有それ自体も含め、創発的な研究の発展過程も重視するものである。

当初は、2020年までの長期調査にて取得していた映像データに加え、追加調査でも撮影を行い、映像・音声編集作業を通して映像を制作することを計画していた。映像はフィールド（福井県大野市）にて上映し、調査対象者らとともに共有、やりとりを行い、別途、日本文化人類学会等でも上映の機会を設けて広く公開することも予定していた。しかし、2020年4月以降、新型コロナの影響により、追加での撮影が困難となり、高齢の方が多く所属する福井県の猟友会を訪れることは難しくなった。また、野生イノシシに対する経口ワクチンのドイツからの輸入が一時ストップし、コロナ対策へ重点的に取り組むために、豚熱対策のプロジェクトにかけられる予算は削減されることになった。上記に伴い、追加調査での撮影が困難となったことに加え、多くの人々を一ヶ所に集めて行う上映会は中止とし、小規模なイベントの機会を利用しての上映に変更している。映像だけで達成できなかった目的は、2020年までの写真を含むイメージデータとフィールドノートに記載された経験をもとに論文の形で昇華させた。

参考：村尾静二・箭内匡・久保正敏編（2014）『映像人類学／シネ・アンソロポロジー——人類学の新たな実践へ』せりか書房。

6 研究成果

(1) 「共有」の人類学（映像制作と共有）

主に2020年までの映像データを用いて豚熱へのレスポンスを捉えた約11分の短編を編集した。その後、2023年1月にスノーモービルでイノシシ猟に出かけて捕獲するまでの様子を撮影・編集して15分の短編にまとめた。

感染リスクを避けるために、高齢のインフォーマントには個別に視聴してもらい、2023年1月に大野市で開催された「狩猟ナイト」では若手の猟師（7名）に共有することで彼らとともに考える機会をつくる映像—人類学を試みた。会場では狩猟に関心をもつ一般参加者も同席していた。箭内によれば「映像が引き起こす共有のプロセスは、文字メディアのそれよりもはるかに直接的で、反省的思考が働く以前に始動するものである」（箭内 2014:9）。スノーモービルでいくつかのトンネルを抜ける際の明暗と振動は、若手の猟師に狩猟の際に自身が感じている感覚的な差異に気づかせた。さらに、映像は、2019年の豚熱感染拡大以降、数年の年月を経て、次第に山にイノシシが戻ってきていることを示すと同時に、猟師たちの捕獲プロセスにPCR検査用の血液を採るという作業が加わり、習慣化していることを示していた。猟師と野生イノシシの直接的な身体を伴う現場での絡み合いが獣医学的な知識と感染対策によっても媒介されている点は、一般参加者の狩猟イメージを更新させることにもなった。

(2) 論文

映像制作の過程で得た知見は、岩波書店『思想』誌のマルチスピーシーズ特集に寄稿した

論文（成果1）においても活かされた。該当論文は、福井県の猟師が動物感染症である豚熱の対策事業に動員された経緯を民族誌的に描き出し、多種の「絡まりあい」がどのように現れ、消えるのかという問いに取り組んだものである。猟師は、餌に豚熱のワクチンを混ぜてイノシシに食べさせ、その地の個体群に豚熱に対する抗体をもたせる「野生イノシシ経口ワクチン散布事業」に協力していたが、その経験によって彼らが実感したのは、人間が入り込み、影響を与えることができない「奥山」の領域が、個体数回復にとって肝心なものとなっている可能性である。本論文は、豚熱の流行に伴うイノシシの大量死という状況の中で、猟師たちが環境の調整をたくみに試みる様子を描写しつつ、その過程で人間の介入が及ばない領域の存在が現れるプロセスを描いている。民俗学や科学技術社会論など複数の領域を横断的に参照しつつ、多種の絡まりあいを捉えようとするマルチスピーシーズ民族誌が、人間の意図や介入が及ばない他性や外部性をどのように扱うことができるのかと問うた。

(3) 比較・共同研究への接続

欧州で現在進行中のイノシシと感染症に関する研究プロジェクト「BOAR」と研究の射程や関心を一にすることから、同研究会にてオンライン発表を行った（成果7）。発表では映像の一部を共有するセッションも設けたことで、猟師の感染症に対する深い理解を示す言動をめぐって質の高い議論することが可能となった。より具体的には、猟師が防疫活動に参加する際の意識形成がいかになされているかについて意見交換するとともに、欧州のバイオセキュリティの考え方とともにワクチンというモノを輸入している日本の対策が、欧州から何を学び、何を改編しているのかということに議論が至った。加えて、欧州の感染症対策に対する調査上の困難についてもやりとりし、長期間にわたり猟師らとともに対策現場に入り、フェーズの変化を観察してきた筆者の調査の特異性も明らかになった。発表前後も含む同プロジェクトでのやりとりを通して、欧州というまとまりで行う比較研究の有用性を学んでいる。東アジア地域との連帯や研究の貢献については、2021年にはオンラインで開催された学会EAAAにて中間報告を行い（成果4）、2023年度は、テーマに「Pandemics, Politics, Potentials」を掲げている同学会（香港にて開催）で感染症をテーマにした分科会を組織し、現地発表を行う予定である（成果8：採択済）。国際学会の場合では、助成期間に得られた成果を共有するだけでなく、研究者間のつながりをつくることで、東アジアにおける豚病の比較研究に向けた働きかけを行っている。

【東アジア研究に対して】

本プロジェクトの具体的な対象は日本における豚熱感染の拡大に伴う防疫活動であるが、これは東アジア諸国の関わりを検討することなしには成立しない課題である。ウイルスの国境を越えた広がりそれ自体が示しているように、食肉の輸出入の状況や水際対策を考えれば自国だけの孤立した防疫体制には限界があり、活発な流通関係にある東アジア諸国内で情報のやりとりと協力的な防疫体制が必要とされる。

助成期間中に十分に実行可能だったのは、日本がバイオセキュリティにおけるモデルとしていた欧州（現在アフリカ豚熱が猛威を振るっている）との比較であったが、映像の撮影・編集・共有を研究プロセスに組み込んだ本プロジェクトの成果は、そうしたバイオセキュリティの論理がどのような東アジア像を浮かびあがらせ、地域ごとにはどのような類似と差異が見られるのかを検討するための準備を整えた。文化・社会の伝播や政治経済の交流に主眼がおかれる傾向にある東アジア諸国間の関係性を、我々のコントロールの範囲を超えて関係性を促進する「ウイルス」に焦点を当て編成し直すことは、東アジア諸国間の新たな「つながり」と「断絶」の形、その形成プロセスを提示する。本研究は言語的差異に還元されない類似性と差異を共有するための重要な媒体となるだけでなく、来る研究会では、東アジア地域の研究者とともに議論を続けることで、東アジア地域の自然経験と感染症に対するレスポンスを東アジア地域において位置づける目処が立っている。

【文化人類学に対して】

第一に、本研究は、ウイルスを含めた多種の絡まりあいを分野横断的に明らかにする点で挑戦的なものである。環境危機、動植物との関係性を主題とする先行研究の多くが、動物種別に人間との関係性を描く傾向にある一方で（Knight 2003, 近藤 2022 他）、現在の危機の様相には複数種が切り分けられない形で関係している。例えば、豚熱ウイルスが思わぬ形で養豚業（ドメスティケーションの領域）とイノシシの狩猟（野生の領域）を結びつけるなど、バイオセキュリティのあり方もこれまでにはなかった変容を迫られている。加えて、豚熱の沖縄県での発生等、野生イノシシの移動が原因とは考えられない状況も発生しており、人間が車両タイヤにウイルスを付着させて媒介していることが指摘されてきている。こうした状況は、一種類の動植物・ウイルスを研究する生物学やウイルス学、加えて、疫学、地域研究等の分野単体では記述が非常に困難である。本プロジェクトでは、複数の要素が関係しあう危機の様相を、隣接領域の成果に学びつつも経験的な次元で捉え、考察した。

第二に、本研究は「問題発見型」のアプローチを徹底することにより可能になったものである。フィールドに長期滞在したことで、感染症流行の前から、発生、感染拡大、蔓延へと、その「ただなか」において進行のフェーズを連続的に記録することが可能になった。鳥インフルエンザなど動物感染症に関する人類学的研究は多数存在しているものの（Lowe 2010, Keck 2018, Fearnly 2015）、2000年以降の日本における動物感染症を対象として、対策現場における長期間の参与観察を行い、人類学的な探求を行った研究は他に見られない。

第三に、本研究は、問題の原因を特定し、責任を負う主体を発見することではなく、原因をひとつに還元することができなくなった複雑な現状に対して「いかにケアすることができるのか」を問うものである。新型コロナウイルス感染症も含め、複数の感染症が同時に流行する「慢性危機」の状況において、修繕、再編のための具体的な行為や調整を描写することに力点をおく本研究は、人類学者アネマリー・モルのいうケアのための「実践誌」に日本において取り組む先駆的な事例と言えるだろう。

8 本プロジェクトに関連した研究実績（書籍、論文、学会発表等。出版・掲載や発表が確定しているものを含めてもかまいません）

【論文】

(1) 北川真紀 (2022) 「複数種と「奥山」をめぐる思考——猟師・イノシシ・ウイルス、その目線の先へ」『思想』1182号、pp.143-158、岩波書店。

【学会発表】

(2) 北川真紀 (2020) 「猟師と「豚コレラ (CSF)」—福井県における野生イノシシへの感染と防疫対策の事例から」日本文化人類学会第54回研究大会。

(3) 北川真紀 (2021) 「動物感染症対策における多様性とフェーズ：日本の猟師と養豚農家による豚熱 (CSF) 防疫をめぐる」第917回東京都立大学社会人類学研究会。

(4) Maki Kitagawa 2021, Vaccination in the Wild: The Temporality of Classical Swine Fever and the Attentiveness of Hunters in Japan, EAAA Conference.

(5) 北川真紀 (2022) 「「野生」の疫学——日本における豚熱とイノシシの生存をめぐる」日本文化人類学会第56回研究大会、分科会「感染症の人間学に向けて」。

(6) 北川真紀 (2023) 「どのように山をくみる>のか：狩猟者の量感と手続きとしての可視化」現代民俗学会第68回研究会「環境民俗学の現代的課題を探る」。

(7) Maki Kitagawa 2023, Hunters and CSF in Japan: Doing Cine-Anthropology, Meeting on the BOAR project (VETERINARIZATION OF EUROPE? Hunting for Wild Boar Futures in the Time of African Swine Fever) .

(8) Maki Kitagawa 2023, Responding to Classical Swine Fever in Japan: Processes of Rearrangement, Attunement, and Connection, EAAA Conference (under review).